



光堂歌句集

中村俊定文庫

文庫 18

987





兌堂勺集

春之部

えりもむらり附りり竹の若

学庵を深くしりて藝ふも

訪きん

おとやう去きやう雨と揚子息ん

幼きも若きりり少純古くとま

河々ぬらり食ふも人まのり



尾のまらるちの中らうろろ茶碗
未こころれをいさしれは凡の
六十一の春とあはれ

蓬葉よりきたるのちりし語れ
ちちりし別るぬりたるも二日月
晴月少しあやうぬ里も麦と摘

船芦還替の賀

穂刈ち又をいさしうろろ世の春

数入ちりちおはれまのよさ
藪のむらさちむらとおきふ傘
糸中に写すのあやぬ日たきき
さのさしむらさちむらさち探さ
かきむらさちむらさち探さ
一人おはれ毛ぬのあはれあは
芥摘りりおはれ藪のむら
はむらのお探さむらさち探さ

ほのろく—さよるほちまの丸
敷ちや睦のひらり—
を猫のまのひきもや後の内
何の芽か—ゆ—らりタア
旅人まのり—砂まらち雑の声
明反の勢ち純—ま—のま
ま—ほちま—成持—り—り
維子ほちも胎り—たきん壁のえ

梅ほち鳥も—の餅を—
おきの葉も蒼く—雨の如
馬吐の白くも蜂りけふお
蜂飛ち梅の本ほちも花まの
いらり—土を作の蝶もま
切株の舟り—出りまの水
おらち種—体り—入初ち—陸
田の杭り—給ち—つ—ま

やう解やうしきりしと尾もたう
榛の木の芽がしの隈や舞を雀
切半やまゝと大京の栢紫麿
さむ針ふるあたや梅よりしら白
あゝむしきとえとさし楳の赤
おきぬし風流きくくめのみ
まき形ゆかゝ倒藪の余定さ
凍しるや鶴のひめく稲り株

そよらから洋く来とちよきのお
紫の年一門の雨掃し行し
のころをさめぬしふるまのま
さす白もいそかぬおとや掃月
お梅のそけく華花茶のの
お代やまゝめとれし下戸あふ
まらふおひりてけのらあひう
のひとねとほわ田舎のり一系統

さくら花はなからさのそなへ
柳はく眉あさささ娘はれ
はさ葉ころ葉と雪のち柳のそ
群まつて梅らん今がれぬ
いつはのち旅人ささわ山櫻
一からちる梅はらう山ささ
水はさささささし斜らほ

標を判る抄

和字根を交えて成すは

傍よりとをゆ

お顔のうささかちる梅
未つてさよ白のそも娘は
おのほおおのそ息し
さささささささささ
転下る所おのちさわおつし
さささささささささ

草子穿くは花よもも茶山連
申小娘藤の浮山くそとさ家
川水也藤く種く家とらく
叶山也友とくそとそ雨あむ
山依の根く使也字の理

大なる屋のうへ

年ちもも也日根と岩の庭躑躅

夏之部

香久山とくそと穿人うあふ
そ途ら床くそとそ給山
申もきけ葛西ら星の果もあき
く海らゆ人らく子祝
中くわる変とかそくも知然
まふの青もく影もわさの松魚
影うらも海増のうけおのけと

くのからぬやうにひらける雀が
羽をもちやうのりうた踏うる
ふしのむらさき鶴やうのや
あけや鼻をすくふささのさ
くひあらうとてふくおのや
なうやうの角敷りやうの声
は鶴や車亭うし
蝉もふくはきりのせうし

麦秋を鳴やしのやあはれ
笑おろし揉むやうのや麦の秋
中あけやあはれや麦ひら
葉の実りあはれはる 何とも
子連れく名のしんあはれ
すしこの月あはれやあはれ
やうなやあはれやあはれ
あはれやあはれやあはれ
あはれやあはれやあはれ

さくさく石の白く埃りく草の赤
ひらひらむすしの白く赤くはま
水の青く草の赤く時りるの菊
アキラカ一服よる申る 京の松
申すもわすれりしをを料ね人
ほくもふき掃らねぬまな猿ん
沸たぬのきこわあや一入る響
茶ももいこ子供も掃る里ん

雪のすくすくあやわ坊の丸
お茶子のくもくく月夜所
何處へくもくもくも若き夜
多勢のやめくもくもく寺
くもくもくもくもく馬のく
御茶子のくもくもくもく
灯もくもくもくもくもく
くもくもくもくもくもく

くはし壽の控行しきさるやえこの果
好の書金もおしき一燈に好のれ
やと川の指さす方なり板をさし
りの舟のきさるかたし一月に
涼しきもせよおぼくまの月
杉風一掃をあらくる田植の節
何くらの牛のよもおぼく早あの日
燈持くしきもさるお回のら月夜

あまのよはなほやと嬉し軒のわめ
こころよしたそとてわる粽うぬ
実こころの舞やあめたり

子庵中

常白きんら籠一羽落ぬやわ
まは梅の庭あひ妹ら夕少袖
あまのよはなほやと涼しおのり
古はわ舟の甲あるかさるらなる

空しき借しを電女
竹枝に我ら眼を満る
るまのむさくらと
煤けふふさふさ
たわら神々
月夜少女の
月夜少女の

秋と部

る中ちのあゝ
叶のむおくら
海士のあら
大なる
く並る
まのち
情陰

情餘のやふもとち余はあはれ
むくもくもく口のまぢりてく馬
おもむもあふにけしむの面
あふもあふも一若の清水桶
雨さしりてくもつたけり
けり色のたもつたけり
さすりてのたもつてくま
あふもあふもあふもあふも

あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも

画賛

あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも
あふもあふもあふもあふも

あふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや
あふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや
あふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや

名月もあふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや
あふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや
あふ月の柳を留らぬも
影をいかにけしむる旅の
旅くもまきゆくはさや

下結ぶらるる田舎のあむむしこたの
り秋もちくきさるる花畑ま
うし何うらけの想ひのぬ秋のま
あまこし柳の末のあまのえ
申し秋も只とびし白く

あまの部

さうあまの柳うらけのあまの部

初あまのまのうらけのあまの部
柳うらけのあまの部
らう月もちくきさるる花畑ま
あまの部
風もちくきさるる花畑ま
初あまの部
あまの部

肉解き

元堂方よりいふのまゝに世に
 死を妙きこととてお化の依り
 まゝをし措きて世の中へ回し
 の人の類もまじくは後よ
 ゆゑに心からとて思ふも
 めもいふにふらふにせむ
 さもにまじくは中へ得て
 例に依りていふに
 一

世波のうたに押動るは或は
 一きあるは
 うらなは
 うらなは
 まゝに
 身
 かい
 さ

梓におくさねを知らずしうちあはれ
のら乃撰にぬしを思ふ
又きくぬしおのき服ぬしあ
ねとぬしを擧てむをさすむしあ
ぬしぬしよく師のらぬしあぬし
おほぬしと席ぬしぬしぬしあ
らぬしぬしぬしぬしぬしぬし
あちぬしのぬしぬしぬし

元堂時行 追刻

